

訪問リハビリの業務

以前までは・・・機能や動作機能の維持

しかし、昨今の高齢者医療の考えや診療報酬の改定などで訪問リハには機能改善・機能向上の面でも期待がかかっています。

特に急性期から退院されて訪問リハを受ける方にとっては、POSが行うリハビリ次第で大きく回復する余地があります。

訪問リハビリテーションで行うのは、病院での短期間リハビリとは違い中長期的なリハビリになります。

訪問におけるセラピストのやりがい

利用者の死に向き合うことができること。

その人がこんな素敵な人生であった、逆に悔やむことも多かったなど、その人に向き合えたと思える瞬間にやりがいを感じる。

そして、自分が関わることで、最後にはその人が良い人生であったと少しでも思ってもらえたらと思い、日々臨床にたずさわっている。

訪問リハビリは生活に直面した場面だからこそそのやりがいがある。

セラピスト歴8年

訪問におけるセラピストのやりがい

訪問リハビリの現場では、急性期病院のようにドンドンと回復する症例はほとんどない。

身体を良くするという視点から、**いかに良い生活を送ってもらえるか**という視点に変わった時に、訪問リハビリに良さを実感した。

病院では入院期間だけの関わりだが、訪問リハビリでは（良くも悪くも）半永久的にその人と関わることができ、その人の人生を変えることができる。

セラピスト歴20年

訪問におけるセラピストの悩み

他職種（特に看護師）との連携

病院では、**その瞬間**を看護師とセラピストが共有できる。

訪問では、一緒にその場にいることはほとんどない。
だからこそ、**普段から看護師と蜜な連携**、コミュニケーションをとるように心がけている。

顔の見える関係が大切である。

訪問におけるセラピストの悩み

指導してくれる上司や先輩、相談相手がいない?!

入職して間もない新人作業療法士にとって、

「リハビリに関する知識が少なくさまざまな症状を持つ患者さんのリハビリにとまどってしまう」

といったことはよくある話。

知識不足を改善するために相談できる上司や指導してくれる先輩がいないことは大きな問題として立ちはだかります。

東大阪には、**PT/ST/OT連絡会** という交流の場があり、そちらに参加することでスキルアップを図ることができている。

訪問におけるセラピストの悩み

身体的・精神的負担やストレス

作業療法士は身体面だけでなく精神疾患を抱える患者さんの心のケアとなるリハビリも実施しますが、これらのリハビリを行っていくなかで

「うまくコミュニケーションが取れない」

「対人刺激に強い患者さんに対応できない」

といった悩みから精神的負担やストレスを抱える人も少なくありません。

・・・

未来の訪問セラピストへのメッセージ

自分自身が学生時代にイメージしたリハビリとは異なった形のリハビリがある。

何より一番大切なことは、「利用者さん（患者さん）が何を望んでいるのか」と利用者さんを主に考えることである。

自分自身がやりたいことをするのではなく、誰が真ん中なのかを忘れないセラピストになって欲しい。